

# プロクロス哲学における基本的な四つの τάξις

——“Στοιχειώδης θεολογική” (prop. 14-20) を中心に——

岡崎 文明

(人文学部哲学教室)

## 梗概

### 序論

- 〔一〕プロクロス哲学における「四つの段階」は最も基本的な体系組織。
- 〔二〕この章で扱う「存在者」は一般的な意味であつて狭義のそれではないが、善一者とは明確に区別される。
- 〔三〕本稿の目的

### 第一章 存在者の三つの区別

- 〔四〕存在者の三分：……不動者、自動者、被動者
- 〔五〕その証明全体の二段構造と証明の前提となる事実（被動者の存在）
- 〔六〕その証明の第一段階（一）……被動者間の原因と結果は円環もしないし無限遡源もしない。
- 〔七〕同右（二）……不動者が存在する。
- 〔八〕右の吟味……不動の第一動者は存在者であつて善一者ではない。
- 〔九〕証明の第二段階（一）……自動者の存在証明のテキスト
- 〔一〇〕同右（二）……自動者の存在証明
- 〔一一〕第一章の結論と吟味

### 第二章 自己帰還者と非物体性

- 〔一二〕右の区別の概要……自動||自己帰還||自己認識||非物体（||魂）

### 第一節 自動者と自己帰還者

- 〔一三〕自動||自己帰還
- 〔一四〕その証明（一）……「自動的なもの」においては「動かすもの」||「動かされるもの」

- 〔一五〕同右（二）……自動の三つの場合
- 〔一六〕同右（三）……第一の場合（物体）と第三の場合（人間）
- 〔一七〕同右（四）……第二の場合（魂）、その活動は自分自身に向いている。
- 〔一八〕第一節の結論と吟味

### 第二節 自己帰還者と非物体性

- 〔一九〕自己帰還者||非物体的。「テーゼ」とその「証明」のテキスト
- 〔二〇〕その証明
- 〔二一〕第二節の結論と吟味

### 第三節 自己帰還者の実体と物体との分離

- 〔二二〕自己帰還者の実体は物体から分離している。
- 〔二三〕その証明（一）……要点とテキスト
- 〔二四〕その証明（二）……第一前提（自己帰還者の実体が物体から分離していないならその活動も分離していない。）
- 〔二五〕その証明（三）……第二前提（するとそれは自分自身に帰還しない。）
- 〔二六〕第三節の結論と吟味

### 第三章 各段階（τάξις）の区別の原理

#### 第一節 異なる段階

- 〔二七〕分与者は被分与者に与える性質を固有に持っている（命題一八）

- [二六] auto tò etha ò esse ipsum
- [二七] その証明 (一) …… 要点とテキスト
- [二八] その証明 (二) …… 与えたものに先在している性質は第一義的に在り、与えられた性質は第二義的に在る。
- [二九] その証明 (三) …… その論理的証明のテキスト
- [三〇] その証明 (四) …… 三つの可能性のうち二つが否定される。
- [三一] 第一節の結論と吟味

第二節 同一の段階

- [三二] 同一の段階に属するものはすべて第一義的にその性質を持つ。(命題一九)

- [三五] その証明 (一) …… 「証明」のテキスト
- [三六] その証明 (二) …… 或る段階に属する性質がその段階の構成員に等しく存在していないならば、その性質は第二義的に在る。
- [三七] 第二節の結論と吟味

第四章 四つの基本的な段階 (tēs)

- [三八] 結論の先取り …… 四つの段階

第一節 魂と物体の区別

- [三九] その証明 (一) …… テキスト
- [四〇] その証明 (二) …… 魂は物体に自動性を分有させている。

第二節 知性と魂の区別

- [四一] その証明 (一) …… テキスト
- [四二] その証明 (二) …… 魂は分有によって知性の絶えざる直知作用に与かる。

第三節 一者と知性の区別

- [四三] その証明 (一) …… テキスト
- [四四] その証明 (二) …… 知性は二、一者は一。一者は知性より普遍的。

[四四] 第四章の結論

結論

- [四六] 思想源泉 (一) …… 総論
- [四七] 思想源泉 (二) …… プラトン『パルメニデス』の「無限の二者」と「存在する二者」
- [四八] 思想源泉 (三) …… プラトン『ティマイオス』の「製作者」と『法律』の「知性」
- [四九] 結論

註

## 序 論

〔一〕プロクロス(412-485)は、その著『神学綱要』において、はじめに(第一章「一」)「一者」(το εἶς)の超越性と内在性を確立し(命題一—六)、その次に(第二章)「善」(το αγαθόν)のそれらを確立すると同時に両者結び付けて「善一者」(τὸ ἀγαθὸν ἢ τὸ εἶς)となし、これを万有の根源として確立している(命題七—十三)<sup>(2)</sup>。そして、この後に(第三章)「存在者」(τὸ ὄν)全体を三つの「段階」(τάξις)に分ち、はじめの「善一者」と合わせて、都合四つの「段階」(τάξις)に階層分けするのである(命題十四—二〇)。

『神学綱要』においては、「善一者」を確立した後直ちに、この「四つの段階」に言及しているところから解せられるように、この諸段階はプロクロス哲学においてその骨格たる最も基本的な組織であると考えられる。

四つの段階とは、具体的に言えば「善一者」、「知性」(νοῦσος)、「魂」(ψυχή)、そして「物体」(τό σωμα)である。ここでは、善一者を除く三つは総称して「存在者」と呼ばれている。

〔二〕「存在者」というこの語に対して次のことに注意しなければならない。

同書の第三章において、「存在者」という語は二つの意味で用いられている。ひとつは、一般的な意味での「存在者」であって、善一者を除くすべての段階に属するものを包括している。既述の存在者はこの意味で用いられている。いまひとつは、狭義の「存在者」である。これはいわゆる「存在者」—「生命」(ζωή) —「知性」という triad/Triade (三つ組)の一つの構成要素を指している。(但し、拙稿においてはこの意味

の存在者には言及しない)

しかし「存在者」という語は、一般的な意味であれ狭義であれ、「善一者」を決して含まず、それと明確に区別されているが、これはプロティノス(205-270)を受けている。われわれはこの区別に特に注目しなければならぬ。なぜなら、これが西洋中世の思想世界に一種の衝撃を与え、おそらくこれを苦しめたであろうからである<sup>(3)</sup>。というのも西洋中世哲学における「一者」は「善」であると共に、「存在者ないし存在」であるのみならずまた「知性」でもあるからである。

〔三〕さて、本稿の意図は、プロクロス哲学において、かかる最も基本的な「四つの段階」が如何にして出現してくるかを、『神学綱要』第三章のテキストに従って詳細に考察するにある。

### 第一章 存在者の三つの区別

〔四〕プロクロスははじめに存在者全体を「動」の観点から三つに分ける(命題十四の「テーゼ」)。テキスト曰く、

「すべての存在者は不動であるかあるいは動かされるかのいずれかである。そしてもしそれが動かされるのであれば、自分自身によって動かされるかあるいは他者によって動かされるかのいずれかである。また一方もしそれが自分自身によって動かされるのであれば、自動的であり、他方もしそれが他者によって動かされるのであれば被動的である。それゆえ、すべてのものは、不動であるか、自動的であるか、被動的であるかのいずれかである。」<sup>(4)</sup>

つまり、存在者においては「不動のもの」(τὸ ἀκίνητον)、「自動的なもの」(τὸ αὐτοκίνητον)そして「被動的なもの」(τὸ ἐτεροκίνητον)の

三つが見られるのである。これらの三つもいわゆる Triade の一つであり、ペリパトス学派の伝統から由来したものとされる<sup>(5)</sup>。ところで、結論を先取りすれば、まず、「不動のもの」とは「自らは動かさずただ他者を動かすだけのもの」を意味し、具体的には「知性」を指している。これはアリストテレスのいわゆる「思惟の思惟」(νοησις νοησις<sup>(6)</sup>)たる「不動の第一動者」(τὸ πρῶτον κινῶν ἀκίνητον<sup>(7)</sup>)に対応する。

また、「自動的なもの」とは「動かすものであると同時に動かされるもの」を意味し、具体的には「魂」を指している。これはプラトンの「自分自身を動かし、すべての運動の始源である」<sup>(8)</sup>とて「魂」(宇宙霊魂)に由来する。

最後に、「被動的なもの」とは「他者によってただ動かされるだけのもの」を意味し、物体・身体を指している。(ただし、不動者が知性であり、自動者が魂であることは、第三章の命題十四から十九まででは直接言及されずに一般的に議論され、命題二〇になつてはじめてそう同定されるのである。このように一般的議論を先行させ次第に限定していく論述の仕方は同書の特徴でもある。)

〔五〕ところで、一般に、論理的に証明されたものは必ずしも実在するとは言えない。なぜなら論理が適用される範囲は実在のそれと異なり、かつ前者は後者よりも広いからである<sup>(9)</sup>。

プロクロスもこの点に留意し、「存在者」全体を三つに区分した後これらが実在することを証明するのであるが(命題十四の「証明」)、そのためにへ一つの事実を論証の前提として導入する<sup>(10)</sup>。それは、「被動的なもの」(物体・身体)は存在している、という経験的事実である。そのテキストは言う。

〔I〕「被動的なるものが在るのであるから、不動のものもまた在ら

ねばならないし、それらの中間に自動的なものも在らねばならない。〔II〕

ここに「被動的なるものが在るのであるから」を事実として提出し、前提として「自動的なもの」の存在性を引き出す。その順序は先項〔四〕にあげたテキストに見られるように、先ず存在者全体を「不動のもの」と「動かされるもの」とに二大別して、その次にさらに「動かされるもの」を「自動的なもの」と「被動的なもの」とに二細分する<sup>(12)</sup>。そして都合三つの存在者を引き出すのである。

〔六〕右のテキストに続いてその「理由」がつけられている。それは二つの部分からなる。その第一段階ではこう言われている。

〔I〕「もしすべての被動的なものが他の動かされたものによって動かされるなら、それらの動は円環をなすかそれとも無限に遡源するかかいずれかである。しかし、いやくもすべての存在者が根源(アルケー)によって限界付けられ(命題十一)、動かすものは動かされるものよりも優れている限り(命題七)、それらの動は円環をなしているのでも無限に遡源するのでもない。してみると何らかの不動の第一の動かすものが存在するのである。〔13〕

もし、ただ「被動的なもの」のみが実在するとした場合には、「被動的なもの」は他の「動かされたもの」によって動かされるのであるから、そこには二つの可能性がある。すなわち、その原因(作動因)と結果の連鎖は円環をなしてめぐるか、それとも無限に遡源するかかいずれかである。しかしそれらはいずれも成立しない。なぜなら、すでに命題十一において「すべての存在者は根源・第一原因によって限界付けられている」

ことが保証されているからである<sup>14)</sup>。

したがって、これは第一原因を上限とした原因・結果の一つの連鎖系列を作っていることになる。それでは、これはどういう系列であろうか。

〔七〕 目下問題とされる系列は、命題七「他のものを生むことができずるものはすべて、生みだされたものよりもすぐれている」<sup>15)</sup>によると、「優劣関係の系列」となる(ここで「より優れている」とは「第一原因により近い」ことを意味する。)

なぜなら、「生む」は広い意味で「動」であるから、命題七を「動」に適用すると、「動かすもの(原因)は動かされるもの(結果)よりも優れている」ことになるからである。

ところで、この優劣関係を持った「動」の連鎖系列は限界付けられている〔六〕のであるから、これを逆行した頂点には第一のものが存在しなくてはならない。だがそれは被動者(＝被動的なもの)ではない。なぜなら、もし被動者なら、この最高の被動者を動かすさきにより優れた動因が他にあることになり、したがって最高の被動者はその系列の頂点となることはできないからである。ゆえに、この「動」の系列の上限には、「被動者」(「動かされるもの」)の段階を超えて「動かないもの」でも「動かすもの」、この意味で「不動の第一の動者」が存在してはならないことになる。

これが、証明の第一段階の結論である。

〔八〕 しかしながら、ここに注意しなければならないことが二つ見られる。

そのひとつは、証明の第一段階の論の流れからすれば、被動者を動かすものは「必ずしも(不動の動者)であるばかりではなく、また(自動的なもの)でもあり得るのではないか」という疑問が生じることである。

確かにもし初めから三つに区分された存在者が念頭におかれていたのであるならばそういう疑問も生じるであろう。しかし、この証明の全体構造は、既に述べたように〔五〕、第一段階ですべての存在者を「動かされるもの」と「不動のもの」とに二分し、第二段階で「動かされるもの」を「自動的なもの」と「被動的なもの」とにさらに二分するという形になっている。したがってこの証明構造からいけば、その第一段階でプロクロスの念頭にあるのは、「不動のもの」と「動かされるもの」の二つのみであって、両者の区別が問題となっているのである。それゆえここで言う「被動的なもの」とは、厳密な意味のそれ〔四〕ではなくて、むしろ多少ゆるく「自分によって動かされるもの」も含む「動かされるもの一般」を指していると考えねばならないであろう。

第一段階では「不動のもの」が「動かされるもの」から分離されて確立するのである。第一段階をそう解釈すれば、続く論証の第二段階の意図もより正確に理解することができるであろう。

またさらに、注意しなければならないもうひとつの点は、「不動の第一動者」はあくまでも存在者の一つであって、存在者の領域を超えた万有の根源・第一原因ではないということである。なぜなら、この「動」の連鎖系列は「広い意味で(動)にかかわるもの」(不動の動者もまたネガティブに「動」にかかわる)の領域(＝存在者)を出ることはできないが、これに対して第一原因は「動」にネガティブにさえかかわらないからである。

〔九〕 さてこうして「不動のもの」の実在性が確かめられたのであるから、次に、「自動的なもの」の実在性の証明に移る。これが証明の第二段階である。そのテキストはこう言っている。

(2)「しかしもしそうであるなら自動的なものもまたあらねばなら

ない。なぜなら、すべてのものが静止していると考えた場合、第一に動かされるものはいったい何であろうか。それは不動のものでもなく(不動のものは本性上動かないからであり)、また被動的なものでもない(被動的なものは他の「動かされた」ものによって動かされるのであるからである)。したがって、第一に動かされるものは自動的なものであることが残る。これこそ被動的なものを不動のものに結合するものだから、これはある仕方では両者の中間にあり、そして動かすものであると同時に動かされるものでもある。なぜなら、両者の一方(Ⅱ不動のもの)はただ動かすのみであり、他方(被動のもの)はただ動かされるだけであるのだからである。<sup>16)</sup>

〔二〇〕ここでは、「不動のもの」が実在するとなれば「自動的なもの」も実在することが証明される。

すべてのものが静止していた場合、「第一に動かされるもの」とは一体何であろうか。

それは「不動のもの」ではない。なぜなら、「不動のもの」は本性上動かないからである。またそれは「厳密な意味での被動的なもの」でもない。なぜなら、「厳密な意味での被動的なもの」は「他のもの」によってのみ動かされ、したがってその「被動的なもの」よりも先に「他のもの」が動因として存在していなければならないからである。

それゆえ、「被動的なもの」が存在する限り、「他者によらず自分自身によって動かされるもの」が、先ず初めに存在していなければならないことになる。

これが「自動的なもの」である。「自動的なもの」は基本的には「動かされるもの」である。そしてある意味で「不動のもの」と「被動的なもの」の中間にあつて、両者の性格をいわば兼ね備えている。すなわち、「第一に動かすものであると同時に動かされるもの」でもある。

これが第二段階の結論である。

〔二一〕そしてここから全体の結論に至る。テキスト曰く。

(Ⅱ)「それゆえ、すべての存在者は不動のものであるか、自動的なものであるか、被動的なものであるか、のいずれかである。」<sup>17)</sup>

ここに、すべての存在者が三つに区分され、そしてこれらが実在することが証明された。すなわち、「不動のもの」、「自動的なもの」そして「被動的なもの」が実在するのである。

ここで三者の関係を整理しておこう。先ず、「動かされるもの」の観点からすれば、これには「自動的なもの」と「被動的なもの」が含まれるが、このうちで前者が「第一のもの」となる。ところが次に、「動かすもの」の観点からすれば、これには「不動のもの」(Ⅱ「不動の第一動者」と「自動的なもの」が含まれるが、このうちで前者が第一のものとなる<sup>18)</sup>。

そして「動かすもの」の方が「動かされるもの」よりもより先であるから、結局「不動の第一の動者」がすべての存在者のうちで「第一のもの」となる(しかしこれは第一原因ではない<sup>18)</sup>)。

とは言つても、この箇所だけでは、不動の動者と自動者との関係が十分に明らかになつたわけではない。

だが存在者のかかる分類においてアリストテレスの知性(不動の第一動者)とプラトンの魂(宇宙靈魂)がプロクロスの仕方では位置づけられ、その体系組織の中に組み込まれていると言ふことができるであろう。

## 第二章 魂と物体の区別

〔二二〕 プロクロソスは同書第三章においてさらに続いて魂と物体とを区別するが、それも先の三区分と同様に「動」の観点からなす。その概略はこうである。

魂は自動的なものであるが、その特徴は「自分自身を動かす」という点にある。では「自分自身を動かす」とは一体何を意味しているのだろうか。それは「自分自身へ帰ること」(τὸς αὐτὸ ἐπιτρέψαι)を意味している。すなわち魂の自動性は自己帰還性を意味しているのである(命題一七)。しかも、自分自身に帰ることができるものは「非物体的」である(命題一五)。またそれは「物体から分離した実体を持っている」のである(命題一六)。このようにして「魂」と「物体」を区別する。

だが、右は四つの基本的な段階(τῶν)を構成するために避けて通ることができない区別であるばかりではなく、ここ(第三章)では直接に述べられていないが、次のような重要な意味も持っているのである。

第一に、この区別は後の命題に受け継がれて「魂の不死」が結論される前提となる(命題一八六、一八七)<sup>(19)</sup>。

第二に、この区別はストア派の魂論への反駁となる。ストア派は魂を物的なもの(火的な氣息)と考えていたからである<sup>(20)</sup>。

さらに第三に、「自分自身へ帰る」とは「自己認識」を意味している(命題八三)<sup>(21)</sup>。ストア派も「自己へ帰り観想する」という意味での自己認識に重要な意義を見出しているが、しかし新プラトン派はストア派におけるよりもさらに深い意義をこの「自己認識」に認める。つまり、自己を認識することは、確かに一つの孤立したものであるとして自己を認識しはするが、しかしそればかりではなく、また自己は可能的にはすべての段階

を含んだものであると認識することでもあるとされる<sup>(22)</sup>。これは、プロクロソスに「汎神論」(Pantheismus)の烙印が押されるひとつの根拠となる。

第三に、プロクロソスにおいては、魂は非物体的でありそして自己認識をする。だが、かかる「自己認識性」と「物体からの分離性」との結合は既にアリストテレスの中に現れている<sup>(23)</sup>。やはりここにもプロクロソスは先行する哲学の成果を自己の哲学体系の中に組み込んでいるのが見られる。その意味でもプロクロソス哲学は古代哲学のある種の総括たるの位置を占めていると言うことができるであろう。

以上の意味で、魂と物体の区別は、かかる新プラトン主義の重要な要素につながっていく意義を持つと言うことができるであろう。

### 第一節 自動者は自己帰還者

〔二三〕 そこでまず、魂の「自動性」と「自己帰還性」の結合から検討していくことにしよう。それは命題一七においてなされている。

その「テーゼ」のテキストはこう述べている。

「第一に自分自身を動かすものはすべて、自分自身へ帰ることができものである。」<sup>(24)</sup>

「自分自身を動かすもの」(自動者)とは、動かす「主体」(動者)が同時に動かされる「対象」(被動者)でもあることを意味している。他方また、「自分自身へ帰るもの」(自己帰還者)とは、帰る「主体」と帰る「目標・対象」とが同じであることを意味している。この意味で右の「テーゼ」は、「自動的なもの」と「自己帰還するもの」とを結合しているのである。では一体、それは何故であろうか。

〔二四〕 その証明が続いて述べられる。そのポイントはこうである。

(一) まず自分自身を動かす場合を三つに分けて、各場合を検討し(一)(1)(2)(3)。

(二) 自分自身を動かすものは、動かしかつ動かされるものであって、「自分自身へ向かう動を持つ」となし、これが「自動」ということである、とする(一)(4)。そして結論に至る(一)(II)。

テキストはその「証明」をこう述べている。

(I)「もしそれが自分自身を動かすのであれば、その動かす活動も自分自身へ向いており、そして動かすものと動かされるものとは同時に一つである。」<sup>(25)</sup>

「自分自身を動かすもの」(自動的なもの)は、その活動(Severea)が自分自身に向けられている。そして、右記の如く(一)(三)「動者」(主体)と「動かされるもの」(対象)とが同じである。それは何故か。

(一五) さらにテキストはその理由をこう述べている。

(1)「その理由はこうである。それは、一方では或る部分によって動かしかつ、他方では別の部分によって動かされるか、あるいは全体が動かしかつ動かされるか、あるいは一方では全体が動かしかつ、他方では部分によって動かされるか、あるいはその逆であるか、のいずれかである。」<sup>(26)</sup>

まず自分自身を動かす仕方を三つに分ける。第一は、全体の中で「動者の部分」と「動かされる部分」とが別々である場合であり、第二は、全体が「動者」であると同時に「動かされるもの」でもある場合であり、第三は、全体が「動者」でありその部分が「動かされるもの」であるか、もしくはその逆の場合である。

以下順次に各場合を吟味していく。

(一六) まず第一の場合である。そのテキストはこう述べている。

(2)「しかしもし動かすものと動かされるものがそれぞれ別の部分であれば、それはそれ自身に即して自動的でないことになるであろう。というのも、それは自動的でない部分から成っており、だが外見的には自動的であると思われるが、本質的にはそうではないのだからである。」<sup>(27)</sup>

第一の場合は、全体が「動かす部分」と「動かされる部分」とに分かれるのであるから、少なくとも後者は、それ自身においては自動的ではなくて被動的である。したがって、全体は被動的部分を含むゆえ、全体として自動的に見えるとしても、本質的には自動的ではないのである。このような場合は物体にしか当てはまらない。なぜなら、全体と部分に分けられるものは物体であるからである。

例えば、一本の列車を考えてみれば、全体が自動的に見えても、しかしその中の機関車が動者であり、客車が被動者である。

次に、前後するが、第二の場合をとばして第三の場合を見てみよう。そのテキストはこう述べている。

(3)「ところでもし全体が動かして部分が動かされる、あるいはその逆、であるなら、両者には同時に同じ観点において動かしかつ動かされる何らかの(共通の)部分が在るだろう。そしてこの部分が、第一に自動的なもの(II最初に自分自身を動かすもの)である。」<sup>(28)</sup>

全体が動かしかつその部分が動かされるのであれば(あるいはその逆であっても)、少なくとも「動かしかつ動かされる」部分が共通に在らねばな



らない。この部分が「自動的なもの」となる。

その例として、プロクロスはおそらく人間を考えているのであろう。人間は魂と身体の複合である。その一方の部分である魂が第一に意識を起こして人間全体（魂と身体の複合）を動かす。そして少なくとも魂は「動かし動かされる」共通の部分となる。

（一七）最後に第二の場合であるが、これが本来の自動的なものである。テキストはこう述べている。

（4）「ところでもし一つの同じものが動かしかつ動かされるのであれば、それは自分自身を動かすものだから、自分自身へ向かう動の活動を持つであろう。だがこのものは、これが活動する目標（自分自身）へ向かって、帰っていることになるのである。」<sup>(29)</sup>

全体が動かしかつ動かされるのであれば、動かし動かされるものは一つの同じ自分である。その場合、自分を動かす動の「活動・働き」は自分自身を目標とし自分自身に向かっていることになる。これが「自分自身に向かつて帰ること・帰還」である。

（一八）以上から結論に至る。テキスト曰く、

（II）「それゆえ、第一に自分自身を動かすものはすべて、自分自身に帰ることができるものである。」<sup>(30)</sup>

ゆえに、第一に（最初に）自分自身を動かす「動」を起こすことができるもの（自動的なもの）はすべて自分自身に帰還することができるものである。ここに自動性と自己帰還性が一致する。これが結論である。こうして証明が終わる。

ところでこの命題十七では直接未だ言及されていないが、自分自身に

向かう活動・働きとは「自己を直接認識する」という活動・働きに他ならない。したがって、自己認識するとは「自己へ帰還する」と同じとなる。そしてこれを第一に最初になすものが、後に命題八三<sup>(31)</sup>で定式化されるごとく、具体的には「魂」である。

## 第二節 自己帰還者は非物理的

（一九）次に、自分へ帰還するものはすべて非物理的であることが述べられる（命題一五）。

そのテキストはこう述べている（同命題の「テーゼ」）。

「自分自身に帰ることができるものはすべて非物理的である。」<sup>(32)</sup>すでに述べたように、自分に帰還するとは自己を認識することであり、認識するものは当然のことながら物体ではあり得ない。

だが、彼の証明は、自己認識までには言及されずに、「物体は自分へ帰還することは本来できないことを示すこと」によってのみなされている。そのテキストはこう述べている（同命題の証明部）。

（I）「物体のいかなるものもその本性上自分自身へ帰ることはない。その理由はこうである。」

（1）もし何かへ帰るものはそれが帰る目標に結合されるのである。確かに明らかに自分自身へ帰る物体の全部分もまた、その全部分と結合することになるであろう。というのは、帰るものとそれが帰る目標との両者が一つになったとき、これがまさに自分自身へ帰ったことになるからである。しかし、このことは、物体の場合には、一般に可分なるものすべての場合にも、不可能である。というのも可分なるもの全体は、その諸部分が分離しているゆえに、つまり異なる諸部分が異なる空間をしめているから、自分自身の全体

に結合されることはない。(2)したがって、どんな物体もその本性上自分自身へ帰り、その結果全体が全体へ帰る、ということはない。」<sup>(33)</sup>

(二一〇) ここでは、物体は自分自身に帰還することはできない、と結論を先に述べて(I)、その理由を続けている。それを追ってみよう。

一般的に言って、或るものが帰る・帰還するとは当のものの目標と結合することである。したがって、右を「自分自身に」帰る・帰還することには当てはめると、これは、帰還者(動者)と帰還目標(対象)とが一つになることを意味する。

ところで、物体とは諸部分に分かたれるものであり、また逆に諸部分から複合されるものである。そこで、もし物体が自分自身に帰還するのであれば、その物体の諸部分の全体がまさに当の諸部分の全体と結合して一つになるであろう。

ところがしかし、このことは物体の場合には本性上不可能である。なぜなら、物体の各部分はそれぞれ別々の空間を占めてお互いに排除しあうのであるから、自分が自分の全体に結合され一つになることはそもそも不可能であるからである。

したがって、物体はどんなものであっても、その全体が全体に帰り、かつ一つになるという仕方では結合することはない。

(二一一) そこから結論へ至る。テキストはこうである。

(II) 「それゆえ、もし何かが自分自身へ帰ることができるものであれば、それは非物体的なものであり部分をもたないものである。」<sup>(34)</sup>

それゆえ、自分自身へ帰還することができるものは、全体と部分とい

う区別のないところの非物体的なものであることになる。これが結論である。

命題一五ではまだ魂にも自己認識にも言及されずに、抽象的にただ自己帰還者は非物体的であるとのみ証明されているが、自己帰還者を具体的に魂とするなら目下で問題とされている事態がやや具体的となる。

魂にはふつう知的部分や感覚的部分等があると云われるが、しかしそれは空間的に分かたれた諸部分を持つているわけではない。そうではなくて、その機能が分かたれているのである。

したがって、魂は一つの全体として、ときには感覚的にときには知性的に働く。だが、感覚的に働くにせよ知性的に働くにせよ、その時々においては一つの活動によって働く。言い換えれば、魂は、部分から成り、或る部分は働いているが、別の部分は休んでいる、というあり方をしているのではなくて、常に一個の全体者として感覚的に働き、また一個の全体者として知性的に働く。

かかる存在者が目下問題とされている非物体的なものとしての魂なのである。

### 第三節 自己帰還者の実体と物体との分離

(二一二) 前節では、自分自身へ帰るものは非物体的であることが明らかにされたが、次に、このものは完全に物体から分離していることが明らかにされる(命題一六)。それはテキスト(同命題「デーゼ」)でこう述べられている。

「自分自身へ帰ることができるものはすべて、あらゆる物体から分離した実体を持つ。」<sup>(35)</sup>

自分自身へ帰ることができるもの(魂)の「実体」は物体から分離し

ていると言うが、この考えはすでにアリストテレスに見られる。アリストテレスの『靈魂論』ではこう言われている。

「ところでもし魂の働きあるいは様態の何ものかが固有のものであるなら、魂は（身体から）分離されることができらるう。」  
(36)

ここでは、「もし魂の働きや様態が固有のものであるなら」という条件下で魂の分離性が語られている。この「固有」(ἴσως)とは「魂にとつて固有」である、つまり身体に依存せず魂にのみ「独自にあるもの」で、身体から「切り離されているもの」という意味である(37)。したがって、この箇所では「固有」は「身体からの分離」を意味すると言えよう。したがって、右の命題は、

「もし魂の〈働き〉が身体から分離していれば、魂の〈実体〉もまた身体から分離してることができるであらう。」

という意味に理解され得る。

プロクロスの説明構造においてもやはりアリストテレスと同様に、「その働き・活動が身体から分離している」という前提(第二前提)があり、そこから「その実体も身体から完全に分離している」と結論されている。この点でもプロクロスはアリストテレスを受け継ぎむしろこれを徹底させている。

〔二二〕 さて、その証明であるが、これは次のような要点を持っている。

(一) 実体の方が活動よりも優れている。

(二) より優れているとは、物体からより分離していることである。

(三) ところで、自己帰還者の活動は物体から分離している。

(四) よって、自己帰還者の実体の方がその活動よりも一層物体から分離している。

さて具体的にそのテキストはこう述べている。これは証明の第一前提である。

(一) 「もし自分自身に帰ることができるといかなる物体からも分離していないとするなら、それは物体から分離したどんな活動も持たないであらう。」

その理由はこうである。

もし実体が物体から分離していないなら、実体から出る活動が物体から分離していることは不可能である。なぜなら、いやしくも実体は物体を必要としているが、活動は物体ではなく自分自身に属しているゆえに自足的である、とするなら、活動は実体よりも優れていることにならうからである。したがって、何らかのものが実体に即して物体から分離していないとするなら、活動に即しても同様であるかそれともなお一層物体よりも分離していないのいずれかである。」(38)

〔二四〕 証明は背理法を用いている。

第一前提は「もし自分自身に帰ることができるものがいかなる物体からも分離していないとするなら」とテーゼを否定した命題を仮定している。

するとそこからの結論は「それは物体から分離したどんな活動も持たないであらう」と帰結されている。

そして続いてその理由が付されている。

(一) もし自分自身に帰ることができるものの実体が物体から分離していないなら、

(2) その実体から由来する活動が物体から分離していることは不可能になる、からである。

とされて、さらにその理由が以下に付されている。敷衍してまとめるなら、

(i) まずその前提として、存在者の活動はその実体から出て存在者の実体は活動よりも優れていることになる。

(ii) 実体は物体を必要としている(II物体に依存している)のに、活動が物体ではなく自分自身に属してその結果自足的であるとするなら、活動が実体よりも優れていることになる。(命題九<sup>(39)</sup>)

(iii) しかしこれは前提(i)に反する。

(iv) よって、活動もまた物体に依存しているか、それともなお一層物体に依存している(属している)かのいづれかである。

それゆえ、「自分自身に帰ることが出来るもの」の実体が物体から分離していないとするなら、必然的にその活動もまた物体から分離していないことになってしまうのである。

(二五) そうすると一体どうなるのであろうか。次に第二前提である。そのテキストはこう言っている。

(II) 「しかし、もしそうであるなら、それは自分自身へ帰らない。

なぜなら、自分自身に帰るものは物体とは別のものであって(命題一五)、物体から分離された活動を持つており、そしてそれは物体を通して働くのでも物体と共に働くのでもないからである。というのも活動も活動の目標も決して物体を必要としないからである。」<sup>(40)</sup>

これをもう少し詳しく分析すればこうなるであろう。

(1) もし、「自分自身に帰ることが出来るもの」の実体が物体から分離していないとするなら、それは必然的にその活動もまた物体から分離していないことになってしまう(第一前提)。

(2) もしそうなら、それは「自分自身へは帰らない。」その理由は

(i) 命題一五から明らかであるように、自分自身へ帰るものは非物体的である。

(ii) したがって、その実体から出る活動も非物体的となる。つまり物体を通してまた物体と共に働くのではない。  
(なぜなら、その活動もその目標も決して物体を必要とせず依存もしていないからである。)

(3) すると「自分自身へかえることができるもの」が「自分自身へ帰らない」ことになり、これは矛盾である。

これが第二前提の帰結である。  
だが、このような矛盾が出てきたのは、そもそも第一前提の仮定(二四)が間違っていたからである。

(二六) そこから結論へ至る。テキストはこう言っている。

(III) 「それゆえ、自分自身に帰るものはあらゆる点で物体から分離している。」<sup>(41)</sup>

よって自己帰還者は完全に物体から分離していなければならないのである。これが第三節の結論である。

ここで自己帰還者として具体的に「魂」を考えると、魂の自己帰還は自己認識であるが、その自己認識は完全に身体から分離していることになる。言い換えれば、自己認識は身体でもまた身体の現実態・機能でも

ないゆえに、魂は自己認識の際に、身体を認識するのではなく、身体  
条件なしに、魂自身を認識するのである。

それではかかる自己認識とは一体いかなる認識であろうか。ここでは  
しかしこれについては具体的に語られていない。

### 第三章 各存在の区別の原理

#### 第一節 異なる段階

〔二七〕 以上は、魂と物体の区別であるが、しかしそればかりではな  
くて、より一般的に拡張された「*τὸ ἐν τῷ ἐν*」間の区別の原理」の考察が必要と  
なる。

それはへ他のものに臨在することによって他のものに或る性質や力を  
与えるものは、それ自身が何よりも先ずその性質や力を固有に純粋に持  
っている」と言う原理である。

プロクロスはこれを次のような一般的な命題にして表している（命題  
一八「テーゼ」）。

「存在することによって他者に或る性質を分与する者はすべて、第  
一義的に、これが被分与者達に分け与える性質そのものである。」〔42〕

右の一般的な命題を魂に適用すれば、魂と身体との「動者―被動者」関  
係はよく説明され理解されるであろう。またこれは、ひいては、魂・生  
命を身体的なものと考える唯物論的思想（具体的にはストア主義）に対  
する反駁にもつながる〔43〕。

〔二八〕 また、ここで「存在すること自体によって或る性質を分与す  
る」と言われているが、この「存在すること自体」(*αὐτὸ τὸ εἶναι*)とは

如何なる意味であろうか。これについて少し言及しておかねばならな  
いであろう。

それは、トマス・アクィナスにおける「存在自体」(*esse ipsum*)と表  
現が非常によく似ている。しかし両者は同じ意味ではない。

トマスにおける「存在」(*esse*)は、これを持っているものの完全性す  
べてを含んでいる。言い換えれば、或るものの存在は、そのものの「全  
存在」(*totum esse*)として、そのものが持つているあらゆる完全性を含  
み、かつそれらの源となっているのである。

しかし『神学綱要』の右の箇所で言われている「存在すること自体」  
とは、トマスと同じ「全存在」の意味ではなくて、被分与者（Ⅱ分有す  
るもの）に「内在すること」を意味している。「内在するもの」（Ⅱ分有  
されたもの）は或る性質・力である。したがって、被分与者はそれ（Ⅱ  
分有されたもの）が内に「存在することによって」(*τὸ εἶναι*, [与格])  
分与者の性質・力を帯びるのである。

例えば、「火」は、それ自体で熱く、熱そのものと言えよう。この火は  
他者を熱くする。この場合、「火」は熱の「分与者」であり、他者は熱の  
「被分与者」である。この火が、他者に熱を分与しかつ熱いと言う性質を  
与えている。つまり他者に熱を「内在させている」のである。しかしこ  
の火は他者にただ「熱い」と言う性質のみを分与するのであって、この  
他者の持つそのほかの完全性（形相）すべてを分与させているのではな  
い。

また、魂においても、これは身体に「存在を与える」のではなくて、  
これが身体に「内在することによって」、身体に「自動性」を与える。な  
ぜなら、魂は「自動性そのもの」であるからである。しかし魂は、身体  
に身体が持つ存在や他の完全性を与えたりはしないのである〔44〕。

この点で、トマスの存在(*esse*)とは大いに異なるとしてはならな

いであろう。

(二九) さて、次にこの命題の証明であるが、この全体は比較的単純な構成をしている。その要点を示せばこうなる。

(I) 「存在することによって他者に分与する者の性質」(例えば自動性)は第一義的にあり、「与えられた者のその性質」は第二義的にある。

(1) その理由はこうである。

両方の性質のあり得る関係は次の三つの場合である。

- (i) 全く同じであるか、
  - (ii) 共通のものが全くないか、
  - (iii) 一方は第一義的にあり、他方は第二義的にあるか、
- のいずれかである。

(2) 第一の場合が否定される。

(3) 第二の場合も否定される。

(II) よって、残るところ第三の場合である。これより結論に至る。

さて、その証明を逐次検討して行こう。そこでそのテキストを見よう。

(I) 「もしそれが、存在すること自体によって或る性質を与え、そしてそれ自身の実体から分与をなすのであれば、一方、与えられた性質は与えるもの自身の実体よりも劣っており、他方、それであるところのもの(「実体」)は「与えられた性質」より偉大であり、より完成している。いやしくも何かを存在させる者はすべて、存在させられた者の本性よりも優れているのだからである(命題七)。それゆえ、与えた者自身において先在している性質は与えられた性質よりも優れている。たしかに与えた者に先在している性質は与えられた性質の本質をなしているが、しかし前者は後者と同じではない。というのも前者は第一義的に在り、後者は第二義的に在るからであ

る。(45)

(三〇) 或る者が他の者の内に「存在すること自体によって」或る性質を与えるということは、元の或る者自身の「実体」(「当の性質自体」)から他の者にその性質の分与をなすことである。そして当然のことであるが、「与えられた性質」は与える者自身の「実体」(「当の性質自体」)よりも劣っており、逆にその「実体」は「与えられた性質」よりも優れ偉大であり、かつ完成している。

なぜなら、或る者が自らの性質を与えて他の者をその性質の者として存在させた場合、存在させた者は存在させられた者の本性よりも優れているからである。このことは命題七においてすでに一般的な形で証明されていた(七)。

この事態をもう少し明確にするなら、与える者に先在している性質は「分有されないもの」であり、与えられた性質は「分有されたもの」である(46)。そして前者は与える者の「実体」であり、他者に依存せず、その意味で「第一義的に」在るが、後者は与えられた者の本質をなすが、しかしそれは前者に依存し、その意味で「第二義的に」在る、と言われる。

(三一) 右で「テーゼ」の十分な説明がなされていると思われるが、テキストではさらに「第一義的に在り、第二義的に在る」ことが論理的な仕方でも説明されている。それは証明の形をとっている。テキストはこう述べている。

(1) 「つまり、①両者の各々は同じであり両者には同じ定義があるか、それとも②両者には共通のものも同じものもまったくないか、それとも③一方は第一義的にあり他方は第二義的にあるか、のいずれかであらねばならない

(2) しかし、もし同じ定義があるとすれば①、前者は原因であり、後者は結果であることにならないはずである。また、前者がそれ自身に即してあり、後者は分有する者においてあることにかならないはずである。また、前者は作るものであり、後者は生じたものであることにもかならないはずである。

(3) 次に、もし両者が同じものを何も持つていないとするならば②、一方が存在によって他方を存在させることにはならないはずである。後者が前者の存在を少しも共有していないからである。」  
(47)

(三二) 右のテキストを検討してみよう。「与える者自身に先在している性質」と「与えられた性質」の関係は、論理的には可能性として三つある。

第一は、両者に同じ定義が属する場合である。言い換えれば両者は同義的に (univocum) 在る場合である。

第二は、両者に全く共通性がない場合である。

第三は、両者の一方が第一義的であり、他方が第二義的にある場合である。言い換えれば両者が異義的に (equivocum) 在る場合である。

以下それらの場合を検討する。

第一の場合、両者の内の一方 (II 与える者自身に先在している性質) が原因となり、他方 (II 与えられた性質) がその結果となる区別もなく、また前者が実体として独立に在り、後者が分有者に依存して在るという区別もない。さらに前者は作る者・存在させる者であり、後者は生じた者・存在させられた者であるという区別もないことになる。

しかし、事実はそのようではないから、第一の場合は成立しない。

第二の場合は、両者に共通のものがまったく無ければ、一方が他方を存在させることにはならないし、一方が他方に分与することにもならない。

い。

しかし実際はそうではない。したがって第二の場合も成立しない。

(三三) このようにして、残るところ第三の場合となる。そのテキストはこう言っている。

(II) 「それゆえ残るところ、存在すること自体によって一方が他方から或る性質を分け与えられる場合、与える者はそれが与える性質を第一義的に有しており、他方被分与者は与える者の性質を第二義的に有していることになる。」  
(48)

結局、先の二つの場合を検討した結果それらは否定されて、論理的には第三の場合が結論として残される。すなわち、与える者は「与える者自身に先在している性質」を第一義的に所有しており、与えられた者はその性質を第二義的に所有していることになる。

命題一八は一般的な形式で述べられている。その意義をもう少し明確にするためにこれを具体的に「魂」と「身体」とに当てはめてみよう。

「身体」は一見したところ自動的である。しかしそれは真の自動性ではない。なぜなら身体は死によって自動性を失うからである。それゆえ身体の自動性は第二義的に存在しているに過ぎない。右で証明した命題一八によれば、第二義的な自動性が存在しているならば、第一義的な自動性が先在している。それが「魂」である。

このように魂と物体・身体の違いが命題一八の一つの具体的な意図であると言える。

しかし命題一八は、魂と身体のみならず、一般的に二つのレベルの異なる段階に当てはまる。言い換えれば、命題一八は各段階の区別の原理なのである。

そこで知性と魂との段階にこれを当てはめてみればどうであろうか。直知活動(=知性認識作用)は魂にも知性にも存在している。しかし「魂」の持つ直知活動は一瞬間においてなされるのであり、或る時には働き、また別の時には休止しているという仕方では存在している。それゆえ魂の直知活動は第二義的な作用と言うことができるであろう。命題一八からすれば、第二義的な直知活動があれば、第一義的なそれが先在しているはずである。これが「魂」と区別された「知性」である。知性が先在させているこの作用は、一瞬ではなく永続的な直知活動の働きである。またそればかりではなく、さらにこの命題は一者と知性との間の区別にも当てはまるのである。

## 第二節 同一の段階

(三四) 次に、同じレベルの *logos* (段階) において在るもの共に共通する性質について見ておかねばならない。魂の段階に属するすべてのもの(例えば宇宙靈魂、人間靈魂、動物靈魂等々)は自動性を持っている。「自動性」はこれらのすべての魂に共通に普遍的にまた永続的に存在している、しかもこれらのいずれにも第一義的に存在しているのである。また知性の段階においても「直知活動・思惟」は知性の段階に属するすべての知性に第一義的に存在している。命題一九においてその事態が論理的な形式で明らかにされる。そのテキストはこう述べている。(命題一九「テーゼ」)

「諸存在者の何らかの本性に第一義的に内在するもの(性質)はすべて、その本性に即して定められているものすべてに一つの定義にしたがってかつ同様の仕方では存在している。」<sup>(19)</sup>

「諸存在者の何らかの本性に第一義的に内在するもの」とは魂の段階であれば「自動性」、知性の段階であれば「直知活動・思惟」である。そして

それらのすべての性質は、その本性に即して定められているすべてのものに「一つの定義(*logos*)にしたがって」つまり「普遍的に」かつ「同様の仕方では」、さらに言い換えると「常に変わらずに永続的に」、存在していると言うのである。

(三五) ではその証明を見てみよう。そのテキストはこう言っている。

(I) 「もしそれ(性質)が、その本性に即して定められているものすべてに同様の仕方では存在せず、或るものには存在し別のものには存在しないとするとするならば、それはその本性に第一義的に存在せず、或るものには第一義的に、別のものつまり分有するものには第二義的に存在していたことは明らかである。

(II) なぜなら、或る時にはこれに在り別の時にはこれに無いようなもの(性質)は、第一義的に在るのでもなくそれ自身に即して在るのでもなく、偶然のものでありそしてそのような仕方では在るものに外からやって来たものであるのだからである。」<sup>(50)</sup>

(三六) この証明を順に追ってみよう。

(I) 或る段階において、その段階に在るものはすべて一つの本性において定められている。例えば、どんな魂もどこまでも魂としての本性を持つており、知性もそうである。

しかしもし、その本来持っている性質が同一の段階に属するすべてのものに「同様の仕方では」存在していず、或る者には存在し他のものには存在していないとするならば、その性質はすべてに普遍的に存在していないことになる。

言い換えれば、或るものには第一義的に存在し、別のものにはそうではなく第二義的に存在していることになる。つまり後者は当の段階に属



していないことになろう。

(2) そのわけは既に述べられている。「同様の仕方」で存在していないものとは、永続的ではなく、或る時には存在し別の時には存在しないと言ふ仕方で存在しているものである。これは偶然的なものであり、それゆえ、この性質はこのものの外からやつて来たものである。これは第二義的にあるものであつて、決して第一義的にあるものではない。したがつてこのものは、当の段階に属さず、このものを分有するものの段階(当の段階の下の段階)に属していることになろう。

(3) それゆえ、或る段階に属しているもの共において、それらの内に第一義的に内在する性質はすべて、一つの定義にしたがつて普遍的に、かつ同様の仕方でも永続的な仕方でもその共の共に臨在しているのである。これが結論である。

〔三七〕 この命題を知性と魂の段階に当てはめると次のようになる。

魂の直知活動は、或る時には働き或る時には休む。魂のこの作用は偶然的である。つまりこれは魂に第二義的に在るものであり、分有されたものとして存在している。したがつて魂は知性の段階には属していず、その下の段階に属することになる。

これに対して、知性は、第一義的に直知活動を持つており、永続的に普遍的にこれを持つていたのである。

ここに魂と知性の区別が一層明確になされる原理がある。

命題一九は知性と魂の各段階の区別を一つの目的としているが、この適用は知性と魂とのみに限られるわけではない。そこでこの命題を「魂と物体」に適用してみよう。

身体(物体)は生きているときには自動性を持つてゐる。しかし死ぬばそれを失う。したがつて自動性は身体(物体)にとつて偶然的である。換言すれば「永続的」ではない。また、無生物の物体は元々被動的であ

り如何なる場合でも自動性を持つてはいない。したがつて物体であればどんな物体も「普遍的に」自動性を持つてゐるわけではない。つまり物体の自動性は物体の外からやつて来たものである。命題一九によればかかる「物体」は「魂」と同じ段階に属することはできない。ここに魂と物体の区別が再確認されるわけである。

このように命題一九は、各段階間の区別をなす原理である命題一八の言わば補助的命題と言ふことができるであろう。これらの二つの原理によつて各段階の区別がなされる。

#### 第四章 四つの基本的な段階 (τέταρτα)

〔三八〕 以上の考察と諸結論から、プロクロス哲学の骨格とも言うべき基本的な四つの段階 (τέταρτα) が導出されるのである。これをなすのが命題二〇である。これは言わば命題一四からの考察の総まとめの位置をしめ、しかも第三章の思索の頂点とも言うべきものである。以下にこれを検討してみよう。先ず結論を先に述べよう(命題二〇の「テーゼ」)。

「魂の実体はすべての物体を超えており、知性的な本性はすべての魂を超えており、一者はすべての知性的なヒュポスタシス(基本的原理)を超えてゐる。」<sup>(51)</sup>

τὸ πρῶτον, 「一者」(τὸ ἓν), 「知性」(ὁ νοῦς), 「魂」(τὸ ψυχή), 「物体」(τὸ σῶμα) の四つの段階が結論されている。

しかし一般にプロクロスの哲学体系はドップスがまとめているように<sup>(52)</sup> 九段階に分けられているが、これは言わば完成された最終の組織体系とも言うべきもので、いまここに現れた四つの段階は最も基本的な組織であり、プロクロス哲学の体系を理解する糸口になると考えられる。

## 第一節 魂と物体の区別

〔三九〕 まず最初に、「魂の段階」と「物体の段階」の区別である。これはすでに述べられたことから明らかであろう(十二)―(二六)。しかし多少面倒でもテキスト(命題二〇の証明部)にしたがっていま一度プロクロスの思索の足跡を追ってみよう。そのテキストはこう説明している。

(I) 「すべての物体は他者によって動かされるが、自分自身を動かすことはもととできない。しかし物体(身体)は魂と共同することによって自分から動き、魂によって生きる。そして一方、魂が臨在する時に物体はある意味で自動的であるが、他方、それは魂を欠く時には被動的である。というのも、物体はそういう本性を自分自身に即して持っているからであり、また魂は自動的なものという本性を持つているからである。つまり、魂はそばに在るところのもの(物体)に自動性を分け与えるからである。だが、魂が存在すること自体によって分け与えるもの(自動性)は、はるかに第一義的な意味で魂そのものに属している(命題一八)。

それゆえ、魂は物体を超えている。というのも、魂は実体に即して自動的なものであるが、かたや物体は魂の分有に即して自動的なものとなるのだからである。〔53〕

〔四〇〕 このテキストによると、

(I) 「物体」の本性は被動的である。つまり元々自分を動かすことはできない。

これに対して「魂」の本性は自動的である。つまり自分を動かすことができるように元々存在しているのである。

(2) ところで、「物体」は魂と共同することによって生きる。(日本語ではかかる物体は「物体」とは言わずに「身体」と言う。)このとき身体は自ら動くことができる。したがって、魂が身体に臨在するときには身体は「自動性」を獲得する。しかし、魂を欠くときにはその自動性を失い、被動的なものとなる。これが物体・身体の本性である。したがって、「物体・身体」は第一義的に自動性を所有してはいないことになる。

これに対して「魂」は自らの本性に即して自動的であり、自分のそばに在るところのものにその「自動性」を分与する。命題一八によれば(二七)、この自動性は物体・身体よりもはるかにすぐれた仕方、つまり第一義的な意味で「魂」そのものに属しているのである。

(3) 魂はこの自動性を物体に分有させ、物体は分有によって自動的となる。それゆえ、魂は物体を「超えている」(Ereben)のである。このようにして、魂と物体の段階の区別が完成する。

## 第二節 知性と魂の区別

〔四一〕 次に、「知性の段階」と「魂の段階」の区別である。これもすでに述べたことから明らかである(三三)―(三七)。しかし少々面倒でもプロクロスの思索を追いかけてみよう。テキスト(命題二〇の証明部)はこのように説明している。

(II) 「またしかし魂は、自分自身によって動かされるのであるから、[実体に即しても]不動の、また活動に即しても不動にとどまる本性に次ぐ段階を有する。なぜなら、一方では自動的なものが動かされるものすべてを、他方では不動のものが動かすものすべてを支配しているからである(命題十四の系)。

したがって、もし魂が自分自身によって動かされて他者を動かすのであれば、魂に先立つて、不動の仕方動かすものが存在してゐなくてはならない。

(III) ところで知性は、不動でありかつ常に同じ仕方活動して、[他者]を動かしている。つまり事実、魂は知性を通して絶えざる直知活動を分有しているが、それは丁度物体が魂を通して自分自身を動かすことを分有しているのと同じなのである。なぜなら、もし魂に絶えざる直知活動が第一義的に在るとしたら、それはすべての魂に、丁度自分を動かすことも在るように、在るであろうからである(命題十九)。したがって、それ[絶えざる直知活動]は魂に第一義的な仕方であるではないことになる。

それゆえ、第一義的な意味で知性的なものが魂に先立つて在らねばならない。つまり、知性が魂に先立つて在らねばならないことになる。(54)

(四二) このテキストによれば、

(1) 魂の自動性は自分自身によって「動かされる」。それに対して不動の本性は実体においても活動においても何者によつても「動かされない」。命題一四の「系」によれば(一一)、魂は不動者の段階に在るのではなく、不動者に後続する段階に在らねばならない。

(2) ところで、「知性」は不動である。そして永遠に同じ仕方絶えず活動して(55)、他者(=魂)を動かす。(これはプラトンの『ティマイオス』の「製作者」やアリストテレスの「思惟の思惟(不動の動者)」に対応する。)

丁度物体が魂の自動性を分有しているように、魂は知性の絶えざる直知活動を分有している。と言うのは、もし魂に永遠の直知活動が、分有ではなくて第一義的に在るとするなら、命題一九により(三

四)、すべての魂が永遠の直知活動を第一義的に持つことになる。これは事実と反する(動物や植物の魂は直知活動を持たないからである)。実際は、魂の実体は永遠であるが、しかしその活動は時間的である(56)。

(3) したがって、魂には第一義的にはなく分有によつて直知活動が存在するのである。言い換えれば、知性が魂に先立つて在らねばならないことになる。つまり知性の段階は魂の段階を「超えている」のである。

このようにして知性と魂の段階的区別が完成される。

### 第三節 一者と知性の区別

(四三) 最後に、一者の段階と知性の段階との区別である。これに直接言及するのは、『神学綱要』ではこの命題二〇が初めてである。

まず例によつてテキストをみてみよう。命題二〇の証明部の最後である。

(IV) 「しかししたしかに、まさに知性に先立つて一者が在らねばならない。なぜなら、知性は不動であるにしても、一ではないからである。つまり、知性は自分自身を直知しかつ自分自身に働きかけるからである。そのうえ、一方、何であれすべての存在者は一者を分有するが(命題一)、他方、すべての存在者が必ずしも知性を分有するわけではない。なぜなら、知性的な知識が認識することの始源であり第一の原因であるゆえに、知性ととの共同がそれらに臨在するようなもの(魂)が、必然的に知識を分有するからである。

それゆえ、一者は知性を超えている。

(V) そして一者を超えたところにはもはや何もない。なぜなら、

一者と善は同じだからである(命題十三)。

それゆえ、一者が、既に示されたごとく(命題一二)、万有の根源である。(67)

〔四四〕 これを詳しく追ってみよう。

(1) 「知性」は「一者」ではない。その理由は二つある。

(i) 知性は不動である。永遠の絶えざる直知活動の状態にある。しかしながら、知性は一ではない。

というのは知性は自分自身を対象として直知しかつ自分自身に働きかけているからである。言い換えれば、同じ知性がその活動の「主体」であると同時に働きかけられる「対象」でもあり、この点で知性は「二つ」であるからである。

よって、一者は知性よりもより優れている。

(ii) 一者はすべての存在者によって分有されている。(命題一(58))

しかし知性はすべての存在者に必ずしも分有されているわけではない。存在者のうち魂にしか分有されないからである。

よって、一者は万有を包含し、したがって知性よりもより普遍的となる。そしてより普遍的なものの方がより優れている。

(2) それゆえ、一者は知性を「超えている」。

(3) そして、一者を超えたところにはもはや何も無い。命題一二によると、善が第一原因であり(59)、また命題一三によると(60)、一者はまた善でもあるからである。それゆえ、「善一者」が「万有の根源」であることになる。

このようにして「善一者」が「知性」から段階として区別される。そしてこの善一者が存在者を超えた第一の段階となる。

〔四五〕 このようにして四つの段階が確立される。左がプロクロスの

結論である。

第一の段階は、「善一者」であり、

第二の段階は、「知性」であり、

第三の段階は、「魂」であり、

第四の段階は、「物体」である。

これらのうちで後の三者は存在者であるが、第一の段階は存在者ではない。

## 結論

〔四六〕 さて、ここでプロクロスの思想源泉を若干考察しておこう。

四つの段階のうち「物体」を除く三つは、いわゆる「Triade」の一種であって、新プラトン主義の三つの「ヒュポスタシス」を構成している。これらの三つはすでにプラトンに現れている。

第一の段階の「善一者」は、『パルメニデス』(Parmenides)の「一者」(τὸ ἓν)と『国家』(Republica)の「善のイデア」(ἰδέα τοῦ ἀγαθοῦ)とを同一視して結びつけられたものである。

第二の段階の「知性」は、『ティマイオス』(Timaios)の「製作者」(δημιουργός)(69)と既述のアリストテレスの「思惟の思惟」〔四〕を同一視して結びつけられたものである。

第三の段階の「魂」は、『ティマイオス』や『法律』(Leges)(第十巻)に現れる「宇宙靈魂」に結合されたものである。そしてこの結合はプロティノス以前にすでにアカデメイアの学派においては常識となっていたようである(61)。

〔四七〕 さて、次に各段階の思想源泉を吟味しておかねばならない。

思想源泉として先ずあげなければならないのは、プラトンの『パルメ

ニデス」である。この書は「論理的究明の練習である」<sup>(62)</sup>とされつつ、一者に関する考察が展開されているが、新プラトン主義者達はこの書を単なる哲学的論理の練習書とは解せず、一者に関する重要な先駆的研究書と見て解釈して行くのである。ここには、一者に関する「八つの仮定」が立てられ、この仮定に従って一者が考察されている。

その第一の仮定 (137c-142a) では「一」についてもしへあるが肯定されるならば、「一は……でもなければ、……でもない」<sup>(63)</sup> という形で展開されて、結局かかる「一」は「無限の一」であることが結論されている。この「一」は「無限の二者」(τὸ ἄπειρον ἕν / unum infinitum) と呼ばれている<sup>(64)</sup>。しかしこれはまた『国家』(505a-b; 532b) の「善のイデア」と同一視される。ここからこれが「善二者」と解釈されるのである。また第二の仮定 (142c-155e) では「一」についてもしへあるが肯定されるならば、「一は……でもあるし……でもある」<sup>(65)</sup> という形で展開されて、結局かかる「一」は「存在しかつ限定された一」であることが結論されている。この「一」は「存在する二者」(τὸ ἕν ἢ / unum finitum) と言われる<sup>(66)</sup>。そしてかかる「二者」が「一般のイデア」と解釈される。そしてこれは、四つの段階のうちの第二の段階に配される。

同書の第一、第二の仮定のかかる解釈は少なくとも一世紀の新ピュタゴラス学派の Moderatus <sup>(67)</sup> に遡ることができるとされる<sup>(68)</sup>。

〔四八〕次に、第二の段階の知性であるが、これは既述のごとく〔四六〕プラトンの『ティマイオス』の「製作者」に結びつけられる。同書では「製作者はすぐれた善きものである」から「同一を保ち、恒常の在り方をし永遠のもの」(つまりイデア)に倣って、この宇宙万有を製作したとされる<sup>(69)</sup>。そしてさらにこの知性をアリストテレスの思惟の思惟たる知性に結びつけるのである。

両者のこの結合は少なくとも二世紀の Albinus <sup>(70)</sup> より以前のストア

派の Poseidonius (c. 135-c. 51 BC) あるいは、新アカデメイア派の Antiochus (c. 130 / 120-c. 68 BC) によって、あるいは古アカデメイア派によってすでになされている。

だが、両者の結合は新プラトン主義者にかんがりの難問を引き起こしたのである。なぜなら、アリストテレスの知性は「不動」であるが、プラトンの知性は規則的で「様な一種の「回転運動」をしているとされるからである<sup>(71)</sup>。

これに対して二世紀の新ピュタゴラス派の Numenius (c. 135-c. 51) や或るグノーシス派は、「より高い知性は不動でより低い知性は動く」と解釈した。プロティノス (204-269) は、初期ではその見解にしたがったが、後にはこの折衷説をきっぱりと退けた。プロクロス (410-485) は、はじめはプロティノスに従っていたが、次第に Numenius 説に傾き、最後には「最高の知性は動と静を超えているが、それより低い知性は動と静を同時に持つ」(『プラトン神学』III, 24, 164) としたのである<sup>(72)</sup>。

さて以上で、簡単であるが、思想源泉の考察をひとまず終えることにしよう。

〔四九〕この四つの段階はプロクロス哲学の最も基本的な体系組織であると言えるであろう。これは後の哲学に受け継がれていくものとなる。例えば『原因論』にはこの四つが修正されつつ現れている。

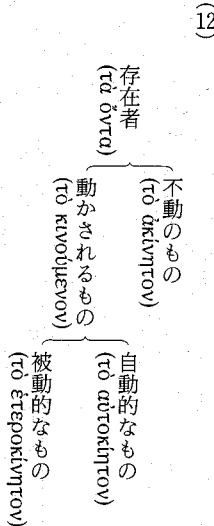
しかしプロクロスの後代への影響史 (Wirkungsgeschichte) は機会を改めて考察したいと思う。

註

- (1) 章分は E. R. Dodds, *Proclus, The Elements of Theology*, 2nd ed. (Oxford, 1963) に従ふ。またプロトクロスの解釈もほぼ本書に従った。
- (2) 拙論「プロトクロスの『善』者」——『神学綱要(命題一—十三)を中心として』(『倫理学研究』第二十集 関西倫理学会編、1990) 参照。
- (3) Raymond Klibansky, *The Continuity of the Platonic Tradition during the Middle Ages - Plato's Parmenides in the Middle Ages and as a Reader of Plato and Plotinus, and his Influence in the Middle Ages and in the Renaissance* in J. Pépin et H.D. Saffrey ed., *Proclus*, (Paris, 1987)
- (4) Proclus, *Elementatio theologica* (以下 E. T. と言ふ)、prop. 14. Πάν το ὄν ἢ ἀκίνητόν ἐστιν ἢ κινούμενον· καὶ εἰ κινούμενον, ἢ ὑφ' ἑαυτοῦ ἢ ὑφ' ἄλλου· καὶ εἰ μὲν ὑφ' ἑαυτοῦ, αὐτοκίνητόν ἐστιν· εἰ δὲ ὑφ' ἄλλου, ἐτεροκίνητόν. πᾶν ἄρα ἢ ἀκίνητόν ἐστιν ἢ αὐτοκίνητόν ἢ ἐτεροκίνητόν.
- (5) E. R. Dodds, *op. cit.*, p. 201. Ἦ καὶ κινῶν λόγον—κινῶν τε ἄρα καὶ κινούμενον—κινούμενον λόγον 三三〇〇九。
- (6) Aristoteles, *Met.*, 1074b34
- (7) *ibid.*, 1012b31, 1074a37, *Physica*, 258b8-9, etc.
- (8) Platon, *Leg.*, 895b1-7. τὴν αὐτὴν ἑαυτὴν θήρου κινῶσαν ὑφ' ἄλλου γὰρ οὐ μᾶλλον ἐμποροῦσιν μετατρέψαι, μηδὲ μᾶλλον γὰρ ἐν αὐτοῖς οὐσιγῆς ἐμποροῦσιν μετατρέψασθαι. δοχὴν ἄρα κινήσεων πρῶτων καὶ πρῶτην ἐν τε ἐστώσων γενόμενὴν καὶ ἐν κινουμένοις οὖσαν τὴν αὐτὴν κινῶσαν φησίουσιν ἀνεγκλίως εἶναι προσβυτήτην καὶ κριτήτην μεταβολῆς πρῶτων, τὴν δὲ ἀλλοιομένην ὑφ' ἑτέρου, κινῶσαν δὲ ἕτερα δευτέρων. KA. Ἀληθέστατα λέγεται.
- (9) この考えは、観方を変えれば、言語ないし概念は必ずしも実在に素朴に直接対応するのではないとする近世哲学や現代哲学の立場に連なる。

(10) というのは、実在を証明するのに概念の領域にのみあるものから出発すれば、原則として概念の領域を出ることができないからである。

(11) E. T. prop. 14. ἀντρέκην γὰρ τῶν ἐτεροκίνητων ὄντων εἶναι καὶ τὸ ἀκίνητον, καὶ μεταδῆλον τοῦτων τὸ αὐτοκίνητον.



結局、右のような分類になる。このような二分法はプラトンの『ソピステス』を想起起す。事実プロトクロスのしるしば同書に言及している。

(13) E. T. prop. 14. εἰ γὰρ πᾶν τὸ ἐτεροκίνητον ὑφ' ἄλλου κινούμενον κινείται, ἢ κύκλῳ αἰ κινήσεως ἢ ἐπ' ἀνεργῶν ἀλλ' οὐτε κύκλῳ οὐτε ἐπ' ἀνεργῶν, εἴτερον ἄπουται τῇ δοχῇ τὰ ὄντα πάντα καὶ τὸ κινῶν τὸ κινούμενον ποιεῖται. ἔσται τι ἄρα ἀκίνητον πρῶτον κινῶν.

(14) E. T. prop. 11. Πάντα τὰ ὄντα πρῶτον ἀπὸ μᾶλλον ἀτίας, τῆς πρῶτης. τελεθε「すべて」の存在は、ただ一つの原因、すなわち第一原因から発出する。その論証は三つのケースに分けられ考えられている。その論旨はこうである。第一のケースは、もしすべての存在者に原因がならぬとするなら、どんな存在者の知識も成立しなくなってしまう。(というの、知識とは原因を知った結果であるが、原因がなければ知識もないことなるからである。)実際はこういうことはありえないから、原因がなくなることなることとなる。第二のケースは、もし原因と結果が円環をなしているとするなら、一つのもの別のものより先(原因)であると同時により後(結果)となってしまう。これは矛盾である。したがってこの場合もありえず、原因と結果の連鎖は円環をなしてはいない。第三のケースは、もし、原因が無限に遡源するとするならば、これも知識が成立しないことになってしまう。なぜなら、知識の元にある原因を捉えることがで

おなへなるからである。しかし実際にはいろいろのうちにちかひなき、したがって原因の無限遡源はなし。それゆゑ、原因の結果は田原でも無限遡源でもなく、第一原因はよつて限界しけられつゝあることになる。そこ存在者はすべてこの第一原因から出たものである。前掲(註2) 拙論参照。

- (15) *E.T. prop. 7.* Πάν τὸ παρακτικὸν ἄλλου κρείττον ἐστὶ τῆς τοῦ παραγομένου φύσεως.
- (16) *E.T. prop. 14.* ἀλλ' εἰ ταῦτα, ἀνίκη καὶ τὸ αὐτοκίνητον εἶναι, εἰ γὰρ οὐαὶν τὰ πάντα, τί ποτε ἔσται τὸ πρῶτος κινούμενον; οὔτε γὰρ τὸ ἀκίνητον (οὐ γὰρ πέφυκεν) οὔτε τὸ ἐπεροκίνητον (ὅτι ἄλλου γὰρ κινεῖται). Δεικνύται ἅπα τὸ αὐτοκίνητον εἶναι τὸ πρῶτος κινούμενον. ἔπει καὶ τοῦτο ἐστὶ τὸ τῷ ἀκινήτῳ τὰ ἐπεροκίνητα συνάπττον, μέσον πως ὄν, κινῶν τε ἄμα καὶ κινούμενον· ἐκείνων γὰρ τὸ μὲν κινεῖ μόνον, τὸ δὲ κινεῖται μόνον.
- (17) *ibid.*, πᾶν ἅπα τὸ ὄν ἢ ἀκίνητόν ἐστιν ἢ αὐτοκίνητον ἢ ἐπεροκίνητον.
- (18) 此れは命題一四の「米」を「穀」にせよ。 *ibid.*, ἐκ δὴ τούτων κἀκείνο φανερόν, ὅτι τῶν μὲν κινουμένων τὸ αὐτοκίνητον πρῶτον, τῶν δὲ κινούντων τὸ ἀκίνητον.
- (19) 命題一八六「すべての魂は非物体的な実体であつて、物体から分離して存在する。」 *E.T. prop. 186.* πᾶσα ψυχὴ ἀσωμάτος ἐστὶν οὐσία καὶ χωριστὴ σῶματος.
- (20) 命題一八七「すべての魂は不滅であり、不死である。」 *prop. 187.* πᾶσα ψυχὴ ἀνώλεθρος ἐστὶ καὶ ἀθάνατος.
- (21) *E.R. Dodds, op. cit.*, p.202.
- (22) 命題八三「自分自身を知ることなしのものは、自己の面を自己自身で照耀することなしである。」 *E.T. prop. 83.* πᾶν τὸ ἐαυτοῦ γνωστικὸν πρὸς ἑαυτὸ πάντη ἐπιστηρικὸν ἐστὶν. / *in Tim. II.* 286. 32: ἢ πρὸς ἑαυτὴν ἐπιστροφή γνῶσις ἐστὶν ἑαυτῆς.
- (23) *E.R. Dodds, op. cit.*, p.203.
- (24) *De anima*, 430b24-26. εἰ δὲ τὴν μηδὲν ἐστὶν ἐναντίον τῶν αἰσθητῶν, αὐτὸ ἑαυτοῦ γινώσκει καὶ ἐνεργεῖα ἐστὶ καὶ χωριστόν.

- (25) *E.T. prop. 17.* Πάν τὸ ἑαυτοῦ κινῶν πρῶτος πρὸς ἑαυτὸ ἐστὶν ἐπιστηρικόν.
- (26) *ibid.*, εἰ γὰρ κινεῖ ἑαυτό, καὶ ἢ κινητικῆ ἐνεργεια αὐτοῦ πρὸς ἑαυτό ἐστὶ, καὶ ἐν ἄμα τὸ κινῶν καὶ τὸ κινούμενον.
- (27) *ibid.*, ἢ γὰρ μέπει μὲν κινεῖ, μέπει δὲ κινεῖται, ἢ ὅλον κινεῖ καὶ κινεῖται, ἢ ὅλον μὲν κινεῖ, μέπει δὲ κινεῖται, ἢ ἕμπαλον.
- (28) *ibid.*, ἀλλ' εἰ μέπος μὲν ἄλλο ἐστὶ τὸ κινῶν, μέπος δὲ ἄλλο τὸ κινούμενον, οὐκ ἔσται καθ' ἑαυτοῦ αὐτοκίνητον, ἐκ μὴ αὐτοκινήτων ὑπεροσῶς, ἀλλὰ δοκοῦν μὲν αὐτοκίνητον, οὐκ ὄν δὲ καθ' οὐσίαν τοιοῦτον.
- (29) *ibid.*, εἰ δὲ ὅλον κινεῖ, μέπος δὲ κινεῖται, ἢ ἕμπαλον, ἔσται τι μέπος ἐν ἀμφοτέροις καθ' ἐν ἄμα κινῶν καὶ κινούμενον, καὶ τοῦτο ἐστὶ τὸ πρῶτος αὐτοκίνητον.
- (30) *ibid.*, εἰ δὲ ἐν καὶ ταῦτόν κινεῖ καὶ κινεῖται, τὴν τοῦ κινεῖν ἐνεργεια πρὸς ἑαυτὸ ἔξει, κινητικὸν ἑαυτοῦ ὄν. πρὸς ὃ δὲ ἐνεργεῖ πρὸς τοῦτο ἐπεροκίνητα.
- (31) *ibid.*, πᾶν ἅπα τὸ ἑαυτοῦ κινῶν πρῶτος πρὸς ἑαυτὸ ἐστὶν ἐπιστηρικόν.
- (32) 註ニ参照。
- (33) *E.T. prop. 15.* Πάν τὸ πρὸς ἑαυτοῦ ἐπιστηρικὸν ἀσωμάτων ἐστὶν. οὐδὲν γὰρ τῶν σωματῶν πρὸς ἑαυτὸ πέφυκεν ἐπιστρέφειν.
- (34) *ibid.*, εἰ γὰρ τὸ ἐπιστρέφον πρὸς τι συνάπτεται ἐκείνῳ πρὸς ὃ ἐπιστρέφει, ὁῖον δὴ ὅτι καὶ τὰ μέρη τοῦ σώματος πάντα πρὸς πάντα συνάπτει τοῦ πρὸς ἑαυτοῦ ἐπιστραφέντος τοῦτο γὰρ ἦν τὸ πρὸς ἑαυτοῦ ἐπιστρέφειν, ὅταν ἐν γένηται ἄμφω, τὸ τε ἐπιστραφέν καὶ πρὸς ὃ ἐπιστρέφει. διὸνατον δὲ ἐπὶ σώματος τοῦτο, καὶ ὅπως τῶν μεριστῶν πάντων οὐ γὰρ ὅλον ὅλα συνάπτεται ἑαυτῷ τὸ μεριστῶν διὰ τὸν τῶν μερῶν χωρισμὸν, ἀλλὰν ἀλλὰχοῦ κειμένων. οὐδὲν ἅπα ὄμα πρὸς ἑαυτὸ πέφυκεν ἐπιστρέφειν, ὡς ὅλον ἐπιστραφέντα πρὸς ὅλον.
- (35) *ibid.*, εἰ τι ἅπα πρὸς ἑαυτοῦ ἐπιστηρικὸν ἐστὶν, ἀσωμάτων ἐστὶ καὶ ἀμπερῶς.

- (35) *E. T. prop. 16*: Πάν τὸ πρὸς ἑαυτὸ ἐπιπρωτικὸν χωριστὴν οὐσίαν ἔχει ταντὸς σώματος.
- (36) *De anima*, 403a10-11. *ei μὲν οὖν ἔστι τι τῶν τῆς ψυχῆς ἔργων ἢ καθήκτων ἰδίου, ἐνδέχεται ἂν αὐτῇ χωρῖζεσθαι*  
但「マリス・マリス」は人間の魂のこと言及してゐる。しか  
し、『神学綱要』命題一六ではさうでない。したがって両者に若干の相違  
が出る。前者では感覚など身体の現実態でもある部分と身体から分離し  
ず、身体の現実態となる部分は分離可能である(413a seqq., b28 seq.)。後  
者では魂は人間ばかりではなくて宇宙靈魂を含んだ人間の魂の  
の实体たるものが考えられる。その場合、魂の实体は物体から分  
離してゐる。なほ魂のことについては『神学綱要』最終章(命題一八  
四(二七))に詳しく述べられてゐる。
- (37) ἰδίου 特殊な個體 ἰδίου の中特殊なものである。その意味は I. one's own, pertaining to oneself, II. separate, distinct, etc. (Liddell & Scott, *A Greek-English Lexicon*, p.818) である。
- (38) *E. T. prop. 16*: *ei γὰρ ἀχώριστον εἴη σώματος οὐτινοσούν, οὐκ ἔστι τινὰ ἐνεργεῖαν σώματος χωριστῆν. ἀδύνατον γὰρ, ἀχώριστον τῆς οὐσίας σώματων οὐσης, τὴν ἀπὸ τῆς οὐσίας ἐνεργεῖαν εἶναι χωριστῆν. ἔσται γὰρ οὗτος ἡ ἐνεργεῖα τῆς οὐσίας κρείττων, εἴτερ ἡ μὲν ἐπιδητικῆς ἔστι σώματων, ἡ δὲ ἀνίτηκῆς, ἑαυτῆς οὐσα καὶ οὐ σώματων. εἰ οὖν τι κατ' οὐσίαν ἔστιν ἀχώριστον, καὶ κατ' ἐνεργεῖαν ὁμοίως ἢ καὶ ἐστὶ μάλλον ἀχώριστον.*
- (39) 命題九「实体に即して活動に即しては自足的なものはすべて、自己の完全性の原因として他の实体に依存する自足的なものはあり、ありすべからざる。」これを「目下の場合」は「自足的な活動」は物体に依存してゐる。实体よりもすべからざるものとなる。しかし、実際には「目下の場合」はあり得ない。*E. T. prop. 9*, Πάν τὸ αὐτάρκες ἢ κατ' οὐσίαν ἢ κατ' ἐνεργεῖαν κρείττων ἔστι τοῦ μὴ αὐτάρκους ἀλλ' εἰς ἀλλήν οὐσίαν ἀνηρημένου τὴν τῆς τελειότητος αἰτίαν.
- (40) *E. T. prop. 16*: *ei δὲ τοῦτο, οὐκ ἐπιπρωτεῖ πρὸς ἑαυτό, τὸ γὰρ πρὸς ἑαυτὸ ἐπιπρωτεῖον, ἀλλὰ ὄν σώματος, ἐνεργεῖαν ἔχει χωρῖζομένην*

- σώματος καὶ οὐ διὰ σώματος οὐδὲ μετὰ σώματος, εἴτερ ἢ τε ἐνεργεῖα καὶ τὸ πρὸς ὃ ἡ ἐνεργεῖα οὐδὲν δεῖται τοῦ σώματος.
- (41) *ibid.* *χωριστὸν ἄρα πάντη σώματων ἔστι τὸ πρὸς ἑαυτὸ ἐπιπρωτεῖον.*
- (42) *E. T. prop. 18*: Πάν τὸ τῷ εἶναι χωρηγόν ἄλλοις αὐτὸ πρῶτως ἔστι τοῦτο, οὐ μετὰδίδωσι τοῖς χωρηγούμενοις.
- (43) *E. R. Dodds, op. cit.*, p.204.
- (44) *ibid.*, p.205. / *Proclus, in Parm.* 787, 24 seqq. *ei τοῖων ἔστιν αἰτία τοῦ παντὸς αὐτῷ τῷ εἶναι τοιοῦτα, τὸ δὲ αὐτῷ τῷ εἶναι τοιοῦτον ἀπὸ τῆς ἑαυτοῦ ποιεῖ οὐσίας, τοῦτο ἔστι πρῶτως ὅτερ τὸ ποιοῦμενον δευτέρως, καὶ ὃ ἔστι πρῶτως δίδωσι τῷ ποιοῦμενῳ δευτέρως, οἷον τὸ πῦρ καὶ δίδωσι θερμότητα ἀλλὰ καὶ ἔστι θερμὸν, ἡ ψυχὴ δίδωσι ζωὴν καὶ ἔχει ζωὴν καὶ ἐπὶ πάντων ἰδοῖς ἂν ἀνηθῆ τὸν λόγον ὅσα αὐτῷ τῷ εἶναι ποιεῖ.*
- (45) *E. T. prop. 18*: *ei γὰρ αὐτῷ τῷ εἶναι δίδωσι καὶ ἀπὸ τῆς ἑαυτοῦ οὐσίας ποιεῖται τὴν μετὰδόν, ὃ μὲν δίδωσιν ὑπεμμένον ἔστι τῆς ἑαυτοῦ οὐσίας, ὃ δὲ ἔστι, μετὰδόν ἔστι καὶ τελειότερον, εἴτερ πᾶν τὸ ὑποστρωτικὸν τινος κρείττων ἔστι τῆς τοῦ ὑπεμμένου φύσεως, τοῦ δευτέρως ἄρα τὸ ἐν αὐτῷ τῷ δευτέρῳ προσημειῶν κρείττωνος ἔστι καὶ ὅτερ ἐκεῖνο μὲν ἔστιν, ἀλλ' οὐ ταῦτον ἐκείνῳ πρῶτως γὰρ ἔστι, τὸ δὲ δευτέρως.*
- (46) 「分有」は「分有する」の意。「分有する」は「分有する」の意。「分有する」は「分有する」の意。*E. T. prop. 23*: Πάν τὸ ἀμείβον ὑπάρτησιν ἀπ' ἑαυτοῦ τὰ μετεχόμενα, καὶ πᾶσαι αἱ μετεχόμενα ὑποστάσεις εἰς ἀμείβοντας ὑπάρξεις ἀντρέφονται.
- (47) *E. T. prop. 18*: ἀνίτηκῆ γὰρ ἢ τὸ αὐτὸ εἶναι ἐκτρέπον καὶ εἶνα λόγον ἀμφοτέρων, ἢ μὴδὲν εἶναι κοινὸν μὴδὲ ταῦτον ἐν ἀμφοῖν, ἢ τὸ μὲν πρῶτως εἶναι, τὸ δὲ δευτέρως. ἀλλ' εἰ μὲν ὁ αὐτὸς λόγος, οὐκ ἔστι τὸ μὲν αἰτιον εἴη, τὸ δὲ ἀποτέλεσμα οὐδ' ἂν τὸ μὲν καθ' αὐτό, τὸ δ' ἐν τῷ μετσοχόντι οὐδὲ τὸ μὲν τοιοῦτον, τὸ δὲ γινόμενον. εἰ δὲ μὴδὲν ἔχει ταῦτον, οὐκ ἂν τῷ εἶναι βίτερον ὑπάρτησιν τὸ λατῶν, μὴδὲν πρὸς τὸ εἶναι τὸ ἐκείνου κοινωσύν.
- (48) *ibid.*, λαίμαται ἄρα τὸ μὲν εἶναι πρῶτως ὃ δίδωσι, τὸ δὲ δευτέρως ὃ



- τὸ δίδον ἔστιν, ἐν οἷς αὐτῷ τῷ εἶναι θάρτερον ἐκ θατέρου χορηγείται.
- (22) *E. T. prop. 19*: Πάν τὸ πρότως ἐνυπαρχον τινὶ φύσει τῶν ὄντων πᾶσι πάρεστι τοῖς κατ' ἐκείνην τὴν φύσιν τετραγμένους καθ' ἕνα λόγον καὶ ὁμοῦτως.
- (23) *ibid.*, εἰ γὰρ μὴ πᾶσιν ὁμοῦτως, ἀλλὰ τοῖς μὲν, τοῖς δ' οὐ, δηλοῦν ὡς οὐκ ἦν ἐν ἐκείνῃ τῇ φύσει πρότως, ἀλλ' ἐν ἄλλοις μὲν πρότως, ἐν ἄλλοις δὲ δευτέρως, τοῖς ποτε μετεχουσι. τὸ γὰρ ποτε μὲν ὑπάρχον, ποτε δὲ μὴ, οὐ πρότως οὐδὲ καθ' αὐτὸ ὑτάχχει, ἀλλ' ἐπεισοδιωδῆς ἔστι καὶ ἀλλαχρόθεν ἐψηφικόν, οἷς ἂν οὕτως ὑπάρχη.
- (24) *E. T. prop. 20*: Πάντων σωμαίων ἐπέκεινά ἐστιν ἡ ψυχῆς οὐσία, καὶ πᾶσων ψυχῶν ἐπέκεινα ἡ νοερά φύσις, καὶ πᾶσων τῶν νοερῶν ὑποστάντων ἐπέκεινα τὸ ἐν.
- (25) *E. R. Dodds, op. cit.*, p. 232.
- (26) *E. T. prop. 20*: πᾶν γὰρ σῶμα κινήτων ἔστιν ὑφ' ἑτέρου, κινεῖν δὲ ἑαυτὸ οὐ μέφουκεν, ἀλλὰ ψυχῆς μετρουσίᾳ κινεῖται ἐξ ἑαυτοῦ, καὶ ζῆν διὰ ψυχῆν' καὶ παρούσης μὲν ψυχῆς αὐτοκινήτων πάς ἔστιν, ἀρούσης δὲ ἐπεροκινήτων, ὡς ταύτην ἔχον καθ' αὐτὴν τὴν φύσιν, καὶ ὡς ψυχῆς τὴν αὐτοκίνητον οὐσίαν λαχούσης. ᾗ γὰρ ἂν παρέρηται, τοῦτῳ μεταδίδωσιν αὐτοκινήσιός' οὐδὲ μεταδίδωσιν αὐτῷ τῷ εἶναι, τοῦτο πολλῶν πρότερον αὐτῆ ἔστιν. ἐπέκεινα ἅρα σωμαίων ἔστιν, ὡς αὐτοκινήτος κατ' οὐσίαν, τῶν κατὰ μέθεξιν αὐτοκινήτων γνωσμένων.
- (27) *ibid.*, πᾶσιν δὲ ἡ ψυχὴ κινουμένη ὑφ' ἑαυτῆς δευτέρω ἔχει τῆξιν τῆς ἀκινήτου φύσεως καὶ κατ' ἐνέργειαν ἀκινήτου ὑπεροχής διότι πάντων μὲν τῶν κινουμένων ἠγέεται τὸ αὐτοκίνητον, πάντων δὲ τῶν κινουίντων τὸ ἀκίνητον. εἰ οὖν ἡ ψυχὴ κινουμένη ὑφ' ἑαυτῆς τὰ ἅλλα κινεῖ, δεῖ πρὸ αὐτῆς εἶναι τὸ ἀκινήτως κινῶν. νοῦς δὲ κινεῖ ἀκίνητος ὧν καὶ δεῖ κατὰ τὰ αὐτὰ ἐνεργῶν. καὶ γὰρ ἡ ψυχὴ διὰ νοῦν μέτεχει τοῦ δεῖ νοεῖν, ὡστερ οἴωμα διὰ ψυχῆν τοῦ ἑαυτὸ κινεῖν. εἰ γὰρ ἦν ἐν ψυχῇ τὸ δεῖ νοεῖν πρότως, πᾶσαις ἂν ὑπῆρχε ψυχαῖς, ὡστερ καὶ τὸ ἑαυτὴν κινεῖν. οὐκ ἅμα ψυχῇ τοῦτο ὑτάχχει πρότως, δεῖ ἅμα πρὸ αὐτῆς εἶναι τὸ πρότως νοητικόν πρὸ τῶν ψυχῶν ἅρα ὁ νοῦς.

- (28) *E. T. prop. 169*: πᾶς νοῦς ἐν αἰῶνι τὴν τε οὐσίαν ἔχει καὶ τὴν δύναμιν καὶ τὴν ἐνέργειαν.
- (29) 命題一九「分有なる魂は常に永遠の美体を持つが、時間と即ち活動なき體」。E. T. prop. 191: πᾶσα ψυχὴ μεθετῆ τὴν μὲν οὐσίαν αἰώνιον ἔχει, τὴν δὲ ἐνέργειαν κατὰ χρόνον.
- (30) *E. T. prop. 20*: ἀλλὰ μὴν καὶ πρὸ τοῦ νοῦ τοῦ ἐν. νοῦς γὰρ εἰ καὶ ἀκίνητος, ἀλλ' οὐχ ἐν νοεῖ γὰρ ἑαυτὸν καὶ ἐνεργεῖ περὶ ἑαυτόν. καὶ τοῦ μὲν ἐνὸς πᾶντα μετεχει τὰ ὁμοιωσῶν ὄντα, νοῦ δὲ οὐ πᾶντα. οἷς γὰρ ἂν παρῆν νοῦ μετρουσία, ταῦτα γνώσεως ἀνάγκη μετέχειν, διότι ἡ νοερά γνώσις ἔστιν ἀρχὴ καὶ αἰτία πρώτη τοῦ γνωστικῆν. ἐπέκεινα ἅρα τὸ ἐν τοῦ νοῦ.
- καὶ οὐκ ἐστὶ τοῦ ἐνὸς ἄλλο ἐπέκεινα. ταῦτόν γὰρ ἐν καὶ τῆραθὸν ἀρχὴ ἅρα πάντων, ὡς δεδεικται.
- (31) 命題「分有するものは常に分有する」。E. T. prop. 1: πᾶν πλῆθος μετέχει πῆ τοῦ ἐνὸς.
- (32) 命題「分有するものは常に分有する」。E. T. prop. 12: πάντων τῶν ὄντων ἀρχὴ καὶ αἰτία πρώτη τὸ ἀγαθόν ἔστιν.
- (33) 命題「分有するものは常に分有する」。E. T. prop. 13: πᾶν ἀγαθὸν ἐνωτικόν ἔστι τῶν μετεχόντων αὐτοῦ, καὶ πᾶσα ἐνωσις ἀγαθόν, καὶ τῆραθὸν τῷ ἐνὶ ταῦτόν.
- (34) *E. R. Dodds, op. cit.*, p. 206.
- (35) *Platon, Parmenides*, 135c11-d4 'Αλλ' οὐδὲ τοῦτο, φάναι, ἔχει λόγον, ἀλλ' ὃ Παρμενίδη, μάλαστα ἐμοιγε καταφαίνεται ὡδε ἔχειν' τὰ μὲν εἶδη ταῦτα ὡστερ παραδείγματα ἑστάναι ἐν τῇ φύσει, τὰ δὲ ἅλλα τοῦτοις ἐπέκεινα καὶ εἶναι ὁμοιωματα, καὶ ἡ μέθεξις αὐτῆ τοῖς ἄλλοις γίνεσθαι τῶν εἰδῶν οὐκ ἄλλη τις ἡ εἰκασθῆναι αὐτοῖς.
- (36) 『トムヘン全集』第四卷(田中美知太郎訳、岩波書店、一九七五年)『ルネサンス』解説三六〇—三六一頁のそれを命ぜらるるの反定がまじめられし。

- (19) Stallbaum, *Platonis Parmenides*, (New York, 1980) p.202.  
(19) 前掲『プラトニオン全集』第四卷の同箇所参照。  
(19) Stallbaum, *ibid.*,  
(19) *Lexikon der alten Welt*, (Alemis, Stuttgart, 1965) pp.1975-6  
(19) E.R. Dodds, *op. cit.*, pp.206-7.  
(19) Platon, *Timaeos*, 28c5-29a6. τόδε δ' οὖν πάλιν ἐπισημαστέον περὶ αὐτοῦ, πρὸς πρότερον τῶν παραθερημάτων ὁ τετρανόμενος αὐτὸν ἀμπηγέστερο, πρότερον πρὸς τὸ κατὰ ταῦτά καὶ ἑαυτὸς ἔχον ἢ πρὸς τὸ γενοῦς, εἰ μὲν δὴ καλὸς ἔστιν ὅδε ὁ κόσμος ὁ τε δημιουργὸς ἀγαθός, ἄλλοι ὡς πρὸς τὸ αἰδίον ἐβλάπεν· εἰ δὲ ὁ μὴδ' εἰρεῖν τι τι θεῖος, πρὸς γενοῦς, παντὶ δὴ σαφές ὅτι πρὸς τὸ αἶδον ὁ μὲν γάρ κἀλλίωτος τῶν γενομένων, ὁ δ' ἄριστος τῶν αἰδίων.  
(19) *Lexikon der alten Welt*, p.101  
(17) Platon, *Leges*, 898a3-b4. ΑΘ. Τοῦτοι δὴ τοῖν κινήσειν τὴν ἐν ἐνὶ γενομένῃν δεῖ περὶ γέ τι μέσον ἀνέγκη κινεῖσθαι, τῶν ἐντόρων οὕσαν ἰλημυτά τι κύκλων, εἶναι τε αὐτὴν τῆ τοῦ νοῦ περιόδῳ πάντως ὡς θωρατὸν οικειοτάτην τε καὶ ὁμοίαν.  
ΚΑ. Πῶς λέγεις;  
ΑΘ. Τὸ κατὰ ταῦτά δήπου καὶ ἑαυτὸς καὶ ἐν τῷ αὐτῷ καὶ περὶ τὰ αὐτὰ καὶ πρὸς τὰ αὐτὰ καὶ ἓνα λόγον καὶ τάξιν ἕκαστον ἕκαστον κινεῖσθαι λέγοντες, νοῦν τὴν τε ἐν ἐνὶ γενομένῃν κίνησιν, σφάδης ἐντόρου ἀνεκκασιμῆνα φοροῦς, οὐτ' ἄν ποτε φανείμην φασίλοι δημιουργοὶ λόγῳ καλῶν εἰκότων.  
ΚΑ. Ὁρθότατα λέγεις.  
(2) E.R. Dodds, *op. cit.*, p.207.

〔本稿は平成二年度の文部省科学研究費補助金(一般研究C)を受けてなされた研究結果である。ここに記して当局に謝意を表したい。〕